

一心響音

校長 武井 正明

この日が楽しみだった。だから、敢えて吹奏楽部の練習から身を遠ざけ、耳が音楽に飢えている状態にして、この日を迎えた。

日曜日にも拘らず、体育館の座席はいっぱいになった。保護者の皆さん、先輩、先生方、地域の方々…。本当にありがたいことである。

私は前半の【クラシックステージ】を聴かせていただいた。

コンクールでは撮影できない演奏の姿を、特に楽器に触れる指先をしっかりと捉えたかった。

3曲目の交響詩「あんたがたどこさ」…思い出深い曲だ。所沢の素晴らしい会場で聴かせてもらった今年の記憶を思い起こしながら、シャッターを切った。



そして一番聴きたかった「蒼き三日月の夜」

今回は緊張せずに、ゆったりと聴かせてもらおうと思っていたが、これが最後だと思うと、ほんの少しの音も聴き漏らすまいと全身に緊張が走る。妻が呆れるくらい、気づけばこの曲ばかり聴いていた。きっと自分の人生で、これほど聴いた曲はないと思う。

吹奏楽部の彼らは、それを更に何倍も上回る回数、聴き、練習を重ねてきた。

それを考えると、とても軽い気持ちでは聴けないのだ。私はカメラを置いた。

そしてやっぱり、今日も君たちは、私の心を揺さぶる演奏をしてくれた。父親との別れの場面ではどうしても涙を禁じえなかった。君たちの努力の集大成がこの曲に総て詰まっているような気がする。今回も感動させてもらった。

あらためてプログラムを捲ってみる。

令和7年度部長の挨拶と令和8年度部長の挨拶が並ぶ。

大役を終えた顔と、これから彼女と同じ道を歩いていく、初々しい顔だ。

こうやってバトンを渡していく…これが伝統なのだろう。

旧部長の言葉には、いつも「感謝」が入っている。感謝あるところに「輪」ができる。そしてそれは「和」となる。あなたが作った和は、聴衆の心を動かしたに違いない。

新部長から伝わってくるのは「温かさ」先輩と同じことはやれないし、やる必要もない。君にしかできないことが必ずあるはずだ。だから君は部長に推されたのだ。君らしくやっていけばいい。

新吹奏楽部が「一心響音」、仲間と協力し合って、支え合って、温かいチームとなっていく姿を、これからも、陰ながら応援させていただきます。